

放物型函数微分方程式の周期解の2重固有値からの分歧

東海産業短大経営学科 新倉保夫 (Yasuo Niikura)

§0. Introduction.

この論文では、放物型函数微分方程式に対する、重複度2のHopf分歧問題をあつかう。我々の目的は、Hopf分歧の存在証明をし、同時に分歧点の近傍における解集合全体の表現を考えることである。我々の主結果は、定理1.4である。

放物型函数微分方程式の単純固有値からのHopf分歧に関する、最近の結果は、Yoshida[17], Morita[10], Yamada-Niikura[16]などがある。

放物型偏微分方程式の単純固有値からのHopf分歧についてはSattinger[12]、多重固有値からのHopf分歧についてはIze[7]などがある。

放物型函数微分方程式の多重固有値からのHopf分歧については、論文はあまり出ていないようである。今年出た本[2]には、分歧理論の最近の多くの結果が載っている。

§1 問題と結果

放物型函数微分方程式

$$(1.1) \quad \begin{cases} \partial_t u(t,x) - \Delta u + \lambda u(t-1,x) + u^3 = 0, & \text{in } \mathbb{R} \times \Omega \\ u(t,x) = u(t+\rho, x) & \text{in } \mathbb{R} \times \Omega \\ u(t,x) = 0 & \text{on } \mathbb{R} \times \partial\Omega \end{cases}$$

において、 $\lambda \in \mathbb{R}$ および $\rho > 0$ を parameter とする分歧問題を考える。ここで、 Ω は \mathbb{R}^n の有界領域、 $\partial\Omega$ は smooth とする。

問題(1.1)は変換

$$(1.2) \quad t = \frac{s}{\mu}, \quad \mu = \frac{2\pi}{\rho}, \quad u(t,x) = u\left(\frac{s}{\mu}, x\right) = v(s,x)$$

をほどこすことにより、同等な問題

$$(1.3) \quad \begin{cases} \mu \partial_s v(s,x) - \Delta v + \lambda v(s-\mu, x) + v^3 = 0, & \text{in } \mathbb{R} \times \Omega \\ v(s,x) = v(s+2\pi, x) & \text{in } \mathbb{R} \times \Omega \\ v(s,x) = 0 & \text{on } \mathbb{R} \times \partial\Omega \end{cases}$$

に帰着される。

さて、関数空間

$$X_{2\pi} = \left\{ v(s,x) \in C^{1+\alpha, 2+2\alpha}(\mathbb{R} \times \Omega) \mid v(s,x) = v(s+2\pi, x), v|_{\mathbb{R} \times \partial\Omega} = 0 \right\}$$

$$Y_{2\pi} = \left\{ v(s,x) \in C^{\alpha, 2\alpha}(\mathbb{R} \times \Omega) \mid v(s,x) = v(s+2\pi, x) \right\}$$

とし、 λ と μ を parameter とする線型作用素 $L(\lambda, \mu) : X_{2\pi} \rightarrow Y_{2\pi}$ を次のように定義する。

$$(1.4) \quad L(\lambda, \mu)v = \mu \partial_s v - \Delta v + \lambda v(s-\mu, x), \quad v \in X_{2\pi}.$$

このとき、問題(1.3)は次のように表現される。

$$(1.5) \quad L(\lambda, \mu)v + v^3 = 0, \quad \text{in } Y_{2\pi}.$$

我々は、いくつかの定義と命題を用意しよう。

定義1.1. 方程式(1.5) (すなわち(1.3)) をみたす組 (λ, μ, v) $\in \mathbb{R} \times \mathbb{R}^+ \times X_{2\pi}$ を(1.5)の解という。

定義1.2. $(\lambda_0, \mu_0, 0) \in \mathbb{R} \times \mathbb{R}^+ \times X_{2\pi}$ が(1.5) (すなわち(1.3)) の分歧点であるとは次がなりたつニと:

$\left\{ \begin{array}{l} (\lambda_0, \mu_0, 0) \text{ の } \mathbb{R} \times \mathbb{R}^+ \times X_{2\pi} \text{ における任意の近傍が } v \neq 0 \text{ を} \\ \text{みたす (1.5) の解をもつ。} \end{array} \right.$

命題1.1. $L(\lambda, \mu) : X_{2\pi} \rightarrow Y_{2\pi}$ は任意の $\lambda \in \mathbb{R}, \mu > 0$ に対して、有界な, index 0 の Fredholm 作用素である。

証明は §2 で与えよ。

命題1.2. $L(\lambda_0, \mu_0)$ が invertible ならば $(\lambda_0, \mu_0, 0)$ は分歧点でない。

証明. 関数 $F(\lambda, \mu, v)$ を $F(\lambda, \mu, v) \equiv L(\lambda, \mu)v + v^3$ により定義すると、(i) $F(\lambda_0, \mu_0, 0) = 0$, (ii) $F_v(\lambda_0, \mu_0, 0) = L(\lambda_0, \mu_0)$. したがって、(1.5)において Banach 空間の陰函数定理を用ひれば、 v は $(\lambda_0, \mu_0, 0)$ の近傍で (λ, μ) に関する解として一意的に表される。一方(1.5)は自明な解の族 $\{(x, \mu, 0) \mid x \in \mathbb{R}, \mu > 0\}$ をもつから、 $v(\lambda, \mu) \equiv 0$. すなわち分歧解は存在しない。□

対偶を考えることにより、次をえる。

(*) $(\lambda_0, \mu_0, 0)$ が分歧点ならば、 $L(\lambda_0, \mu_0)$ は invertible でない。

$L(\lambda_0, \mu_0)$ は invertible でないとき, 命題 1.11 により,

$$(1.6) \quad \dim NL(\lambda_0, \mu_0) = \text{codim } RL(\lambda_0, \mu_0) = m, \quad 0 < m < \infty$$

がなりたつとしている。

次にどのような (λ, μ) の値に対して, $\dim NL(\lambda, \mu) \neq 0$ となるかを考える。いま $\varphi(x)$ を $-\Delta$ (Dirichlet zero) の固有函数, ω をその固有值とする。すなはち

$$(1.7) \quad \begin{cases} -\Delta \varphi = \omega \varphi, & \text{in } \Omega, \\ \varphi = 0 & \text{on } \partial\Omega \end{cases}$$

とする。(1.4)において,

$$(1.8) \quad v = e^{inx} \varphi, \quad n \in \mathbb{Z}$$

とおくと,

$$(1.9) \quad L(\lambda, \mu) e^{inx} \varphi = (inx\mu + \omega + \lambda e^{-inx\mu}) e^{inx} \varphi.$$

したがって,

$$(1.10) \quad in\mu + \omega + \lambda e^{-inx\mu} = 0, \quad n \in \mathbb{Z}, \quad \omega \in \sigma(-\Delta),$$

ならば, $NL(\lambda, \mu) \neq \{0\}$ であるが, 逆もなりたつ。

命題 1.3. $NL(\lambda, \mu) \neq \{0\}$ であるための必要十分条件は, ある $n \in \mathbb{Z}$, ある $\omega \in \sigma(-\Delta)$ に対して (1.10) がなりたつこと。

証明. 必要性を証明しよう。 $0 \neq v \in X_{2\pi}$ があると,

$$L(\lambda, \mu)v = 0, \quad \text{in } Y_{2\pi}, \quad v \in X_{2\pi}.$$

がなりたつとする。 v は, $L^2((0, 2\pi) \times \Omega)$ の意味で, $v =$

$$\sum_{n \in \mathbb{Z}, j \in N} a_{nj} e^{inx} g_j \text{ と表わせ, ある } (n, j) \text{ に対して } a_{nj} \neq 0 \text{ が}$$

なりたつ。よって, $L(\lambda, \mu) e^{inx} q_j = 0$, すなはち (1.10) がなりたつ. \square

(1.10) をみたす対 (λ, μ) は, 次のように簡単に求められる.

(1.10) を実部, 虚部に分解すれば

$$(1.11) \quad \begin{cases} \omega + \lambda \cos n\mu = 0, \\ n\mu - \lambda \sin n\mu = 0. \end{cases}$$

これより,

$$(1.12) \quad n\mu = -\omega \tan n\mu$$

$$(1.13) \quad \omega^2 + (n\mu)^2 = \lambda^2$$

をえる。したがって, 各々おおび ω を固定するごとに, (1.12) をみたす μ が可算無限個定まり, その各 μ に対して, 正負の 2 つの入が定まる。

(1.10) を満足する (λ, μ) を "Possible bifurcation point" と呼ぼう。我々の問題は, Possible bifurcation point がいかなる条件のもとで分歧点 (Bifurcation point) となるか, さらに, 分岐解の族はどうのよに parametrize できるかを明らかにすることである。

この論文ではとくに double multiplicity, いいかえと ω が $(-\Delta)$ の double eigenvalue, の場合について述べる。このとき, (1.6) の $m=4$ であることに注意する。

我々は次の (A,1), (A,2) を仮定する。

$$(A.1) \quad NL(\lambda_0, \mu_0) = \text{Span} \{ \varphi_1 \cos s, \varphi_1 \sin s, \varphi_2 \cos s, \varphi_2 \sin s \}.$$

$$(A.2) \quad \begin{cases} \int_{\Omega} \varphi_1^3 \varphi_2 \neq 0 \text{ または } \int_{\Omega} \varphi_1 \varphi_2^3 \neq 0 \text{ または} \\ \int_{\Omega} \varphi_1^2 \varphi_2^2 \neq \int_{\Omega} \varphi_1^4 \neq 3 \int_{\Omega} \varphi_1^2 \varphi_2^2 \text{ または } \int_{\Omega} \varphi_1^2 \varphi_2^2 \neq \int_{\Omega} \varphi_2^4 \neq 3 \int_{\Omega} \varphi_1^2 \varphi_2^2. \end{cases}$$

注意. (A.1), (A.2) より, $n=1$ および φ_1, φ_2 の共通の固有値 ω に対して (1.10) がなりたつ:

$$\lambda \mu_0 + \omega + \lambda_0 e^{-i\mu_0} = 0.$$

我々の主結果は次の定理である。

定理 1.4 (A.1), (A.2) の仮定のもとで, 問題 (1.3) は $(\lambda_0, \mu_0, 0)$ より分歧する, $(\varepsilon, \theta) \in \mathbb{R}^+ \times S^1$ によって parametrize される, 少くとも 2 組の分歧解の族をもつ。

さらに $(\lambda_0, \mu_0, 0)$ の近傍での分歧解の全体は, 次のように表される:

$$\left\{ \begin{array}{l} \lambda = \left\{ (\lambda(\varepsilon), \mu(\varepsilon), \Xi(\varepsilon, \theta) + \omega(\varepsilon, \theta)) \mid \Xi(\varepsilon, \theta) \in NL(\lambda_0, \mu_0), \omega(\varepsilon, \theta) \right. \\ \left. \in RL(\lambda_0, \mu_0), 0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0, 0 \leq \theta < 2\pi \right\} \\ \lambda(\cdot) \in C^1, \lambda(0) = \lambda_0, \\ \mu(\cdot) \in C^1, \mu(0) = \mu_0, \\ \Xi(\varepsilon, \theta) = \varepsilon \operatorname{Re}(a e^{i(s+\theta)} \varphi_1 + b e^{i(s+\theta)} \varphi_2), \\ \{(a, b) \in \mathbb{C}^2 \mid |a|^2 + |b|^2 = 1, \Gamma(a, b, \varepsilon) = 0\}, \\ \Gamma \text{ は複素数値 } C^1 \text{ 函数}, \\ \omega(\varepsilon, \theta) = f(\Xi(\varepsilon, \theta), \lambda(\varepsilon), \mu(\varepsilon)), \\ f \text{ は } RL(\lambda_0, \mu_0) \text{ 値 } C^1 \text{ 函数で}, f(0, \lambda_0, \mu_0) = 0. \end{array} \right.$$

§2 準備

このSectionでは、証明するために必要な関数解析的な準備をする。まず、次のNotationを導入しよう：

$$N = N(L(\lambda_0, \mu_0)) = \{u \in X_{2\pi} \mid L(\lambda_0, \mu_0)u = 0\},$$

$$R = R(L(\lambda_0, \mu_0)) = \{L(\lambda_0, \mu_0)u \mid u \in X_{2\pi}\}.$$

命題1.1 がなりたつことが、問題(1.3)を解析するために、
基本的である。まずその証明を与える。

命題1.1の証明. $(\mu_0 s - \Delta) : X_{2\pi} \rightarrow Y_{2\pi}$ は有界な、index 0
のFredholm作用素である（実際、invertible operator）。証
明は、Yamada-Niikura[16], Lemma 3.1にある。Sattinger[2], §5
を参照してもよい。さて、 $L(\lambda, \mu)$ を

$$L(\lambda, \mu) = (\mu_0 s - \Delta) + D_{-\mu}, \quad (D_{-\mu}v)(s, x) = v(s - \mu, x),$$

と表わし、T.Kato[8], P238, Th.5.26 を適用することにより。
 $L(\lambda, \mu)$ が index 0 のFredholm作用素であることを証明しよう。
実際、 $T = (\mu_0 s - \Delta)$, $A = D_{-\mu}$ とおくと、 $D(T) = X_{2\pi}$, $D(A) =$
 $Y_{2\pi}$ であるから、 A は T -compact 作用素（定義は[8], P194）
であり、Th.5.26の仮定がみたされる。よって命題1.1は証明さ
れた。□

さて、仮定(A.1)により、

$$(2.1) \quad N = \text{span}_R \{\varphi_1 \cos s, \varphi_1 \sin s, \varphi_2 \cos s, \varphi_2 \sin s\}$$

である。写像 $P : Y_{2\pi} \rightarrow N$ を

$$(2.2) \quad P u = \sum_{\lambda=1}^2 \left\{ (u, \varphi_i \cos s) \varphi_i \cos s + (u, \varphi_i \sin s) \varphi_i \sin s \right\}$$

により定義する。ここで

$$(2.3) \quad (u, v) = \frac{1}{\pi} \int_0^{2\pi} \int_{\Omega} u v dx ds.$$

このとき、次の命題がなりたつ。

命題2.2. 実像 P は、任意の (λ, μ) に対して、 $L(\lambda, \mu)$ と可換な射影作用素である。

証明. P が $L(\lambda, \mu)$ と可換なことをいふには、 ∂_s , Δ および D_μ と可換なことを示せばよい。証明は簡単な計算により与えられるので省略する。 $P^2 u = P u$ であることも容易に計算できる。□

さて、証明に用いる計算を可能にするため、実零空間 N に \mathbb{C}^2 の複素座標を導入しよう。まず複素有限次元空間 N_C , N_* を次のように定義する：

$$(2.4) \quad N_C = N \otimes \mathbb{C} = \text{span}_{\mathbb{C}} \{ e^{\pm is} \varphi_1, e^{\pm is} \varphi_2 \}$$

$$(2.5) \quad N_* = \text{span}_{\mathbb{C}} \{ e^{is} \varphi_1, e^{is} \varphi_2 \}$$

さて、任意の $z \in N$ は、 $z \in N \subset N_C$ とみて、

$$(2.6) \quad z = a e^{is} \varphi_1 + b e^{is} \varphi_2 + \bar{a} e^{-is} \varphi_1 + \bar{b} e^{-is} \varphi_2, a, b \in \mathbb{C},$$

と表される。同相平像 $i_+: N \rightarrow N_*$, $j_+: N_* \rightarrow \mathbb{C}^2$ を

$$(2.7) \quad i_+: a e^{is} \varphi_1 + b e^{is} \varphi_2 + \bar{a} e^{-is} \varphi_1 + \bar{b} e^{-is} \varphi_2 \rightarrow a e^{is} \varphi_1 + b e^{is} \varphi_2$$

$$(2.8) \quad j_+: a e^{is} \varphi_1 + b e^{is} \varphi_2 \rightarrow (a, b)$$

により定義する。

我々は、§3でしばしば N から N への写像 f に対して、可換図式

$$(2.9) \quad \begin{array}{ccc} N & \xrightarrow{f} & N \\ \downarrow & f_* & \downarrow i_* \\ N_* & \xrightarrow{f_*} & N_* \\ \downarrow & f_c & \downarrow i_* \\ \mathbb{C}^2 & \xrightarrow{f_c} & \mathbb{C}^2 \end{array}$$

により定義される写像 f_* , f_c を考える。たとえば $L(\lambda, \mu): N \rightarrow N$ に対して、 $L(\lambda, \mu)_*: N_* \rightarrow N_*$, $L(\lambda, \mu)_c: \mathbb{C}^2 \rightarrow \mathbb{C}^2$ を考へると、

$$(2.10) \quad L(\lambda, \mu)_* = L(\lambda, \mu) \Big|_{N_*},$$

$$(2.11) \quad L(\lambda, \mu)_c = \begin{bmatrix} i\mu + \omega + \lambda e^{-i\mu} & 0 \\ 0 & i\mu + \omega + \lambda e^{-i\mu} \end{bmatrix}$$

であることに注意する。また写像 $P_*: Y_{2\pi} \rightarrow N_*$ を $P_* = i_* P$ により定義すると、 P_* は射影作用素である。

$$(2.12) \quad P_* v = \sum_{i=1}^2 \langle v, e^{is\varphi_i} \rangle_{\mathbb{C}} e^{is\varphi_i},$$

$$(2.13) \quad \langle v, e^{is\varphi_i} \rangle_{\mathbb{C}} = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \int_{\mathbb{R}} v e^{-is\varphi_i} dx ds, \quad i=1, 2,$$

$$(2.14) \quad \langle u, v \rangle_{\mathbb{C}} = \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \int_{\mathbb{R}} u(s, x) \overline{v(s, x)} dx ds$$

である。

最後に、§3で用いられる記号を定めよう。

(i) $z \in N$ に対して、 $|z|^2 = |a|^2 + |b|^2$ と定める。ここで a, b は (2.6) にたりとする。

$$(ii) \quad \chi_i = e^{is\varphi_i}, \quad \bar{\chi}_i = e^{-is\varphi_i} \quad (i=1, 2),$$

§3 証明.

このSectionでは、§2の準備のもとに、定理1.4を証明します。

$$(1.5) \quad L(\lambda, \mu)v + v^3 = 0, \quad v \in X_{2\pi},$$

において、

$$(3.1) \quad v = z + w, \quad z \in N, \quad w \in R,$$

とき、 $N = PY_{2\pi}$ および $R = (I - P)Y_{2\pi}$ 上の方程式に分解す

る：

$$(3.2) \quad L(\lambda, \mu)z + P(z+w)^3 = 0 \quad \text{in } N,$$

$$(3.3) \quad L(\lambda, \mu)w + (I-P)(z+w)^3 = 0 \quad \text{in } R.$$

まず(3.3)をBanach空間における陰函数定理を適用して、 w を λ, μ, z に関して解こう。(3.3)の左辺を $F(w, z, \lambda, \mu)$ とおく：

$$F(w, z, \lambda, \mu) = L(\lambda, \mu)w + (I-P)(z+w)^3.$$

このとき、 $F(w, z, \lambda, \mu) : (R \cap X_{2\pi}) \times N \times R \times R^+ \rightarrow R$ は、連続的Fréchet微分可能で、

$$(1) \quad F(0, 0, \lambda_0, \mu_0) = 0,$$

$$(2) \quad F_w(0, 0, \lambda_0, \mu_0) = L(\lambda_0, \mu_0) : R \cap X_{2\pi} \rightarrow R \text{ は homeomorphism,}$$

をみたすから、陰函数定理([12]§3, P60)により。 w は

$$(3.4) \quad w = h(z, \lambda, \mu), \quad h(0, \lambda_0, \mu_0) = 0, \quad w = O(|z|^3)$$

と解ける。ここで $h : N \times R \times R^+ \rightarrow R \cap X_{2\pi}$ は C^1 級である。(3.4)

を(3.2)に代入すると、 N における方程式

$$(3.5) \quad L(\lambda, \mu)z + P(z + h(z, \lambda, \mu))^3 = 0, \quad \text{in } N,$$

を得る。 (3.5) は「分歧方程式」(Bifurcation equation) とよばれ、 (Possible) bifurcation point の近傍における解の構造を決定する。

以下では、 (3.5) を解くことを考える。 (3.5) において、

$$(3.6) \quad z = \varepsilon y, |y| = 1,$$

とおき、 ε でわると、

$$(3.7) \quad L(\lambda, \mu)y + \frac{1}{\varepsilon} P(\varepsilon y + h(\varepsilon y, \lambda, \mu))^3 = 0$$

を得る。ここで、左辺の第2項を $H(y, \lambda, \mu, \varepsilon)$ とおくと、

$$(3.8) \quad H(y, \lambda, \mu, \varepsilon) = \frac{1}{\varepsilon} P(\varepsilon y + h(\varepsilon y, \lambda, \mu))^3 \\ = \varepsilon^2 Py^3 + h_1(y, \lambda, \mu, \varepsilon),$$

$$(3.9) \quad h_1(y, \lambda, \mu, \varepsilon) = H(y, \lambda, \mu, \varepsilon) - \varepsilon^2 Py^3 = O(\varepsilon^4 |y|^5) = O(\varepsilon^4)$$

と表すことができる。したがって (3.7) は、

$$(3.10) \quad L(\lambda, \mu)y + \varepsilon^2(Py^3 + h_2(y, \lambda, \mu, \varepsilon)) = 0$$

とかけろ。ここで、 $h_2(y, \lambda, \mu, \varepsilon) = \frac{1}{\varepsilon^2} h_1(y, \lambda, \mu, \varepsilon)$ 。 (3.10) において、

$$(3.11) \quad y = a\psi_1 + b\psi_2 + \bar{a}\bar{\psi}_1 + \bar{b}\bar{\psi}_2, |a|^2 + |b|^2 = 1, a, b \in \mathbb{C},$$

とおき、 $\psi_n = e^{i\omega n} q_n$, $n=1, 2$ の各成分を計算しよう。 (1.9) により、

$$(3.12) \quad L(\lambda, \mu)\psi_n = (\lambda\mu + \omega + \lambda e^{-i\omega n})\psi_n, \quad n=1, 2,$$

であり、 $\delta 2$ で述べた $\langle \cdot, \psi_n \rangle$ を計算することにより、 (3.10) は次の system に帰着される。

$$(3.13) \quad \begin{cases} a(\dot{\gamma}\mu + \omega + \lambda e^{-i\mu}) + \langle \varepsilon^2(y^3 + h_2(y, \lambda, \mu, \varepsilon)), \gamma_1 \rangle_C = 0 \\ b(\dot{\gamma}\mu + \omega + \lambda e^{-i\mu}) + \langle \varepsilon^2(y^3 + h_2(y, \lambda, \mu, \varepsilon)), \gamma_2 \rangle_C = 0 \end{cases}$$

ここで、 $y = a\gamma_1 + b\gamma_2 + \bar{a}\bar{\gamma}_1 + \bar{b}\bar{\gamma}_2$ である。

命題3.1. 複素数値函数 $\alpha = \alpha(\lambda, \mu)$ を $\alpha(\lambda, \mu) = i\mu + \omega + \lambda e^{-i\mu}$ により定義すると、函数 α は $(\lambda_0, \mu_0) \in \mathbb{R}^2$ の近傍から $0 \in \mathbb{C}$ の近傍への homeomorphism である。

証明. $\text{Im}[\frac{\partial \alpha}{\partial \mu} / \frac{\partial \alpha}{\partial \lambda}]_{(\lambda_0, \mu_0)} \neq 0$ を示せばよい。容易に、

$$\frac{\partial \alpha}{\partial \lambda} = e^{-i\mu}, \quad \frac{\partial \alpha}{\partial \mu} = i - i\lambda e^{-i\mu} = i(1 - \lambda e^{-i\mu}),$$

よって、

$$\frac{\partial \alpha}{\partial \mu} / \frac{\partial \alpha}{\partial \lambda} = i(1 - \lambda e^{-i\mu}) e^{i\mu} = i(e^{i\mu} - \lambda)$$

この虚数部分の (λ_0, μ_0) における値は、

$$\text{Im}[\frac{\partial \alpha}{\partial \mu} / \frac{\partial \alpha}{\partial \lambda}]_{(\lambda_0, \mu_0)} = \cos \mu_0 - \lambda_0 \neq 0$$

である。たとえば、 $\cos \mu_0 = \lambda_0$ とすると、(1.11) より、

$$0 = \omega + \lambda_0 \cos \mu_0 = \omega + \lambda_0^2,$$

となる。このことは (1.7) の固有値 ω が正であることに反する。

□

我々は、(3.13)を解くために、新たに複素 parameter β を導入して、次の "Modified bifurcation equation" を考える：

$$(3.14) \quad \begin{cases} a\alpha - \bar{b}\beta + \varepsilon^2 g_1(a, b, \alpha, \varepsilon) = 0 \\ b\alpha + \bar{a}\beta + \varepsilon^2 g_2(a, b, \alpha, \varepsilon) = 0, \end{cases}$$

ここで、 $g_\lambda(a, b, \alpha, \varepsilon)$, $\lambda = 1, 2$, は

$$(3.15) \quad g_i(a, b, \alpha, \varepsilon) \equiv \langle y^3 + f_{i2}(y, \lambda, \mu, \varepsilon), e^{is\varphi_i} \rangle_C, \quad i=1, 2,$$

$$y = a e^{is\varphi_1} + b e^{is\varphi_2} + \bar{a} e^{-is\varphi_1} + \bar{b} e^{-is\varphi_2},$$

$$\alpha = i\mu + \omega + \lambda e^{-is\mu},$$

により定義される関数である。Modified bifurcation equation (3.14)において、 $\beta=0$ とすると、(3.14)は(3.13)と一致するに注意する。

さて、(3.14)の左辺を $F(\alpha, \beta; (a, b); \varepsilon)$ とおく。すなわち (3.14) は、

$$(3.16) \quad F(\alpha, \beta; (a, b); \varepsilon) \equiv \begin{bmatrix} a & -\bar{b} \\ b & \bar{a} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \alpha \\ \beta \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} \varepsilon^2 g_1(a, b; \alpha, \varepsilon) \\ \varepsilon^2 g_2(a, b; \alpha, \varepsilon) \end{bmatrix} = 0,$$

と表される。(3.16)に陰函数定理を適用して、 α と β に関する解を求める。

$$(1) \quad F(0, 0; (a, b), 0) = 0$$

$$(2) \quad F_{(\alpha, \beta)}(0, 0; (a, b), 0) = \begin{bmatrix} a & -\bar{b} \\ b & \bar{a} \end{bmatrix} \in GL_2(C),$$

(したがって、(3.16)は α と β に関する解を求めて、

$$(3.17) \quad \begin{cases} \alpha = \tilde{\alpha}(a, b, \varepsilon) \\ \beta = \tilde{\beta}(a, b, \varepsilon) \end{cases}$$

と表される。

以上の議論をまとめると、分歧方程式(3.5)の $(0, \lambda_0, \mu_0)$ の近傍における解集合 S は、次のよう に表されることがわかる。

定理3.2

$$S = \left\{ (z, \lambda, \mu) \mid z = \varepsilon(a e^{is\varphi_1} + b e^{is\varphi_2}), (\lambda, \mu) = \alpha^{-1} \tilde{\alpha}(a, b, \varepsilon) \right. \\ \left. a, b \in \mathbb{C}, |a|^2 + |b|^2 = 1, \tilde{\beta}(a, b, \varepsilon) = 0, 0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0 \right\}.$$

次に上で求めた関数 $\tilde{\alpha}$, $\tilde{\beta}$ が (a, b, ε) の "のよ" な関数であるかを調べよう。

命題3.3. $\delta \in \mathbb{C}$, $|\delta| = 1$ とするとき,

$$(1) \quad g_i(a, b, \alpha, -\varepsilon) = g_i(a, b, \alpha, \varepsilon)$$

$$(2) \quad g_i(\delta a, \delta b, \alpha, \varepsilon) = \delta g_i(a, b, \alpha, \varepsilon).$$

証明. (1) は (3.2), (3.3) の左辺が z, w について奇関数であることから容易に計算される。 (2) は (3.2), (3.3) の左辺で与えられる作用素が, time shift $T(\theta)$ と可換であることをから得られる。 $= \Rightarrow$, $[T(\theta)v](s, x) = v(s+\theta, x)$. \square

さて (3.14) より,

$$(3.18) \quad \begin{cases} a\alpha - \bar{b}\beta + \varepsilon^2 g_1(a, b, \alpha, \varepsilon) = 0 \\ b\alpha + \bar{a}\beta + \varepsilon^2 g_2(a, b, \alpha, \varepsilon) = 0. \end{cases}$$

これから容易に,

$$(3.19) \quad \alpha = -\varepsilon^2 (\bar{a}g_1(a, b, \alpha, \varepsilon) + \bar{b}g_2(a, b, \alpha, \varepsilon)),$$

$$(3.20) \quad \beta = \varepsilon^2 (bg_1(a, b, \alpha, \varepsilon) - \bar{a}g_2(a, b, \alpha, \varepsilon)).$$

命題3.4. 複素数値関数 $\tilde{\alpha}$, $\tilde{\beta}$ は次の性質をもつ。

$$(1) \quad \tilde{\alpha}(a, b, -\varepsilon) = \tilde{\alpha}(a, b, \varepsilon)$$

$$(2) \quad \tilde{\beta}(a, b, -\varepsilon) = \tilde{\beta}(a, b, \varepsilon)$$

$$(3) \tilde{\alpha}(\zeta a, \zeta b, \varepsilon) = \tilde{\alpha}(a, b, \varepsilon), \quad \zeta \in \mathbb{C}, |\zeta|=1,$$

$$(4) \tilde{\beta}(\zeta a, \zeta b, \varepsilon) = \zeta^2 \tilde{\beta}(a, b, \varepsilon), \quad \zeta \in \mathbb{C}, |\zeta|=1,$$

証明. (3.19), (3.20)において, g_1, g_2 に命題3.3を適用し, 陰

函数定理による解の一意性を考慮すれば, 容易に検証される。

□

さて, (3.19), (3.20) (= (3.15)) を用いると,

$$\begin{aligned} (3.21) \quad \alpha &= -\varepsilon^2 \langle y^3 + h_2, a e^{is\varphi_1} + b e^{is\varphi_2} \rangle_{\mathbb{C}} \\ &= -\varepsilon^2 \langle (a\varphi_1 + b\varphi_2 + \bar{a}\bar{\varphi}_1 + \bar{b}\bar{\varphi}_2)^3, a\varphi_1 + b\varphi_2 \rangle_{\mathbb{C}} + O(\varepsilon^4), \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} (3.22) \quad \beta &= \varepsilon^2 \langle y^3 + h_2, \bar{b} e^{is\varphi_1} - \bar{a} e^{is\varphi_2} \rangle_{\mathbb{C}} \\ &= \varepsilon^2 \langle (a\varphi_1 + b\varphi_2 + \bar{a}\bar{\varphi}_1 + \bar{b}\bar{\varphi}_2)^3, \bar{b}\varphi_1 - \bar{a}\varphi_2 \rangle_{\mathbb{C}} + O(\varepsilon^4). \end{aligned}$$

これより, たやすく次の命題を得る。

命題3.5.

$$(3.23) \quad \begin{cases} \tilde{\alpha}(a, b, \varepsilon) = \varepsilon^2 A_0(a, b) + O(\varepsilon^4) \\ \tilde{\beta}(a, b, \varepsilon) = \varepsilon^2 B_0(a, b) + O(\varepsilon^4), \end{cases}$$

ここで,

$$(3.24) \quad \begin{cases} A_0(a, b) = - \langle (a\varphi_1 + b\varphi_2 + \bar{a}\bar{\varphi}_1 + \bar{b}\bar{\varphi}_2)^3, a\varphi_1 + b\varphi_2 \rangle_{\mathbb{C}} \\ B_0(a, b) = \langle (a\varphi_1 + b\varphi_2 + \bar{a}\bar{\varphi}_1 + \bar{b}\bar{\varphi}_2)^3, \bar{b}\varphi_1 - \bar{a}\varphi_2 \rangle_{\mathbb{C}} \end{cases}$$

証明. 上に述べたことから明らかである。□

命題3.6. ある $a, b \in \mathbb{C} \setminus \{0\}$ に対して, $B_0(a, b) \neq 0$ ならば,
 $\varepsilon \rightarrow 0$ のとき $y_0 = \operatorname{Re}(a\varphi_1 + b\varphi_2)$ 方向へ漸近する分歧解の族は
 存在しない。

証明. 定理3.2よりあきらかである。□

系. すべての $a, \ell \in \mathbb{C} \setminus \{0\}$ に対して, $B_0(a, \ell) \neq 0$ ならば $(0, \lambda_0, \mu_0)$ は分歧点ではない。

命題3.6. の逆は必ずしも真でないことに注意する。

さて, $B_0(a, \ell) = 0$ をみたす (a, ℓ) が少くとも 2つ存在することはを証明しよう。計算により,

$$\begin{aligned}
 (3.25) \quad B_0(a, \ell) &= \left\langle (a\varphi_1 + \ell\varphi_2 + \bar{a}\bar{\varphi}_1 + \bar{\ell}\bar{\varphi}_2)^3, \bar{\ell}\varphi_1 - \bar{a}\varphi_2 \right\rangle_C \\
 &= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} \int_{\mathbb{S}^2} (a\varphi_1 + \ell\varphi_2 + \bar{a}\bar{\varphi}_1 + \bar{\ell}\bar{\varphi}_2)^3 (\bar{\ell}\varphi_1 - \bar{a}\varphi_2) dx ds \\
 &= 3a^2 (-|a|^2 \int \varphi_1^3 \varphi_2 + |\ell|^2 \int \varphi_1^3 \varphi_2 - 2|\ell|^2 \int \varphi_1 \varphi_2^3) \\
 &\quad + 3a\ell (|a|^2 \int \varphi_1^4 - |\ell|^2 \int \varphi_2^4 - 2|a|^2 \int \varphi_1^2 \varphi_2^2 + 2|\ell|^2 \int \varphi_1^2 \varphi_2^2 \\
 &\quad + 3\ell^2 (-|a|^2 \int \varphi_1 \varphi_2^3 + |\ell|^2 \int \varphi_1 \varphi_2^3 + 2|a|^2 \int \varphi_1^3 \varphi_2) \\
 &\quad - 3a^3 \bar{\ell} \int \varphi_1^2 \varphi_2^2 + 3\bar{a}\ell^3 \int \varphi_1^2 \varphi_2^2.
 \end{aligned}$$

記号を簡単にするため、各積分値を次のようにおく:

$$(3.26) \quad A = \int \varphi_1^4, \quad B = \int \varphi_1^3 \varphi_2, \quad C = \int \varphi_1^2 \varphi_2^2, \quad D = \int \varphi_1 \varphi_2^3, \quad E = \int \varphi_2^4.$$

この記号を用いれば、(3.25) は次のようになり:

$$\left. \begin{aligned}
 (3.27) \quad B_0(a, \ell) &= 3a^2 (-|a|^2 B + |\ell|^2 B - 2|\ell|^2 D) \\
 &\quad + 3a\ell (|a|^2 A - |\ell|^2 E - 2|a|^2 C + 2|\ell|^2 C) \\
 &\quad + 3\ell^2 (-|a|^2 D + |\ell|^2 D + 2|a|^2 B) \\
 &\quad - 3a^3 \bar{\ell} C + 3\bar{a}\ell^3 C, \\
 a, \ell \in \mathbb{C}, \quad |a|^2 + |\ell|^2 &= 1.
 \end{aligned} \right\}$$

我々は、分歧解が存在するための必要条件として、(3.27)を

また複素数の組 (a, ℓ) をさがそう。 (i) $D \neq 0$, (ii) $B \neq 0$,
 (iii) $B = D = 0$ の 3 つの場合に分けて考える。

(i) $D \neq 0$. このとき, $B_0(a, \ell) = 0$ ならば $a \neq 0$, (3.27) に依
 って,

$$(3.28) \quad \ell = k a, \quad k \in \mathbb{C}, \quad a \neq 0$$

とおくと, 次の式をえる:

$$(3.29) \quad \begin{aligned} B_0(a, ka) = 3a^2|a|^2 & \left\{ (-B + |k|^2 B - 2|k|^2 D) \right. \\ & + k(A - |k|^2 E - 2C + 2|k|^2 C) \\ & + k^2(-D + |k|^2 D + 2B) \\ & \left. - \bar{k}C + k^3 C \right\}. \end{aligned}$$

さて, 実像 $f_a: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ を

$$(3.30) \quad f_a(k) = B_0(a, ka), \quad a \neq 0 \text{ は任意に固定},$$

により定義し, 充分大きい $R > 0$ に対して, $D_R = \{k \in \mathbb{C} \mid |k| \leq R\}$
 上, $0 \in \mathbb{C}$ に対する実像度 $\deg(f_a, D_R, 0)$ を考える。実像 f_a
 は, $f(k) = k^2|k|^2$ により定義される実像 f (= homotopic) である
 から,

$$(3.31) \quad \deg(f_a, D_R, 0) = \deg(f, D_R, 0) = 2, \quad \forall a \neq 0.$$

これで命題 3.5 から, 実像 $\beta_{a,\varepsilon}: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ を

$$(3.32) \quad \beta_{a,\varepsilon}(k) = \frac{1}{\varepsilon^2} \tilde{\beta}(a, ka, \varepsilon), \quad a \neq 0, \quad 0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0.$$

により定義すれば, $\beta_{a,\varepsilon}$ は $f_a = \beta_{a,0}$ (= homotopic) であるから,

$$(3.33) \quad \deg(\beta_{a,\varepsilon}, D_R, 0) = \deg(f_a, D_R, 0), \quad a \neq 0, \quad 0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0.$$

よって、(3.31), (3.32) から

$$(3.34) \quad \deg(\beta_{a,\varepsilon}, D_R, 0) = 2, \quad \forall a \neq 0, \quad 0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0.$$

(たがつて、半像度の性質により、 $\widetilde{\beta}(a, \ell a, \varepsilon) = 0$ は、任意の $a \neq 0$ および任意の ε , $0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0$ に対して少くとも 2 つの解 ℓ_1, ℓ_2 をもつ。よって命題 3.4(4) で与えた $\widetilde{\beta}$ の性質を考慮すれば、 $\widetilde{\beta}(a, \ell, \varepsilon) = 0$ は、 $0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0$ および $\{z \in \mathbb{C} \mid |z| = 1\}$ による ε parametrize される 2 つの解の族をもつことわかる。

(ii) $B \neq 0$. このとき $B_0(a, \ell) = 0$ ならば $\ell \neq 0$.

$$(3.35) \quad a = \ell b, \quad \ell \in \mathbb{C}, \quad \ell \neq 0$$

とおくと、

$$(3.36) \quad \begin{aligned} B_0(\ell b, \ell) &= 3\ell^2|b|^2 \left\{ \ell^2(-|\ell|^2 B + B - 2D) \right. \\ &\quad + \ell(|\ell|^2 A - E - 2|\ell|^2 C + 2C) \\ &\quad + (-|\ell|^2 D + D + 2|\ell|^2 C + 2C) \\ &\quad \left. - \ell^3 C + \bar{\ell} C \right\}. \end{aligned}$$

半像 $g_\ell : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ を

$$(3.37) \quad g_\ell(\ell) = B_0(\ell b, \ell), \quad \ell \neq 0 \text{ は任意に固定},$$

b より定義すると、

$$(3.38) \quad \deg(g_\ell, D_R, 0) = \deg(g, D_R, 0) = 2,$$

ここで半像 g は $g(\ell) = \ell^2|b|^2$ より定義されるものである。

さて (i) と同様に、半像 $\beta_{\ell, \varepsilon} : \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}$ を

$$(3.39) \quad \beta_{\ell, \varepsilon}(\ell) = \frac{1}{\varepsilon^2} \widetilde{\beta}(\ell b, \ell, \varepsilon), \quad \ell \neq 0, \quad 0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0.$$

により定義すれば、 $\beta_{\ell,0} = g_\ell$ であり、

$$(3.40) \quad \deg(\beta_{\ell,\varepsilon}, D_R, 0) = \deg(g_\ell, D_R, 0), \quad \ell \neq 0, \quad 0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0.$$

が、平偏度の homotopy 性質により得られる。したがって、

$$(3.41) \quad \deg(\beta_{\ell,\varepsilon}, D_R, 0) = 2, \quad \forall \ell \neq 0, \quad 0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0.$$

このことから、(i)と同じ結論が得られることがわかる。

(iii) $B = D = 0$. このとき (3.27) は次の形になる:

$$(3.42) \quad B_0(a, \ell) = 3a\ell(|a|^2A - |\ell|^2E - 2|a|^2C + 2|\ell|^2C) \\ - 3a^3\bar{\ell} + 3\bar{a}\ell^3C,$$

また (3.30), (3.37) は次のようになります。

$$(3.43) \quad f_a(\ell) = B_0(a, \ell a) \\ = 3a^2|a|^2\left\{ \ell(A - |\ell|^2E - 2C + 2|\ell|^2C) - \bar{\ell}C + \ell^3C \right\}$$

$$(3.44) \quad g_\ell(\ell) = B_0(\ell\ell, \ell) \\ = 3\ell^2|\ell|^2\left\{ \ell(|\ell|^2A - E - 2|\ell|^2C + 2C) - \ell^3C + \bar{\ell}C \right\}$$

我々は、 $S^3 = \{(a, \ell) \in \mathbb{C}^2 \mid |a|^2 + |\ell|^2 = 1\}$ とおき、 $\deg_{S^3}(B_0, S^3, 0)$ を計算しよう。 $\varepsilon = \varepsilon_0$ で、もし $\{(0, \ell) \mid |\ell| = 1\}$ の充分小さな近傍 $U_0 = \{(a, \ell) \in S^3 \mid |a| \leq \varepsilon\}$ がとれて、 $B_0(\partial U_0) \neq 0$ をみたすとすれば、 $\deg_{S^3}(B_0, S^3, 0)$ は

$$(3.45) \quad \deg_{S^3}(B_0, S^3, 0) = \deg_{S^3}(B_0, S^3 \setminus U_0, 0) + \deg_{S^3}(B_0, U_0, 0) \\ = \deg(f_a, D_R, 0) + \deg(g_\ell, D_\delta, 0),$$

R は充分大、 δ は充分小、

によつて与えられるものである。さて、 D_R の半径 R を充分大

きくとよとき、(3.43)の形から、

$$(3.46) \quad f_a(k) \sim k|k|^2(2C-E) + k^3C, \text{ on } D_R \text{ over } 0.$$

また D_δ の半径 $\delta (\approx \frac{1}{R})$ を充分小さくとよとき、(3.48)の形から、

$$(3.47) \quad g_\ell(\ell) \sim \ell(2C-E) + \bar{\ell}C, \quad \text{on } D_\varepsilon \text{ over } 0,$$

であることがわかる。したがって、(3.46), (3.47) を (3.45) に適用すれば、

$$(3.48) \quad \deg_{S_1}(B_0, S^3, 0) \\ = \deg(-k|k|^2(2C-E) + k^3C, D_R, 0) + \deg(\ell(2C-E) + \bar{\ell}C, D_\varepsilon, 0)$$

を得る。

以上と全く同様にして、充分小さく δ に対して、

$\{(a, 0) \mid |a|=1\}$ の近傍 $V_0 = \{(a, \ell) \in S^3 \mid |\ell| \leq \delta\}$ で $B_0(\partial V_0) \neq 0$ を満たすものがとれるとき、

$$(3.49) \quad \deg_{S_1}(B_0, S^3, 0) = \deg_{S_1}(B_0, S^3 \setminus V_0, 0) + \deg_{S_1}(B_0, V_0, 0) \\ = \deg(g_\ell, D_R, 0) + \deg(f_a, D_\delta, 0)$$

を得る。ここで

$$(3.50) \quad f_a(k) \sim k(A-2C) - \bar{k}C, \quad \text{on } D_\delta \text{ over } 0$$

$$(3.51) \quad g_\ell(\ell) \sim \ell|\ell|^2(A-2C) - \ell^3C \quad \text{on } D_R \text{ over } 0$$

を用いれば、

$$(3.52) \quad \deg_{S_1}(B_0, S^3, 0) \\ = \deg(k(A-2C) - \bar{k}C, D_\delta, 0) + \deg(\ell|\ell|^2(A-2C) - \ell^3C, D_R, 0)$$

を得る。

さて仮定(A.2)と(3.26)により、

$$(iii,1) \quad C \neq A \neq 3C \quad \text{または} \quad (iii,2) \quad C \neq E \neq 3C$$

がなりたつ。まず(iii,1)がなりたつとする。このとき、
 $|A-2C| \neq C$ である。

$$(iii,1,1) \quad |A-2C| > C. \quad \text{このとき},$$

$$(3.53) \quad |\kappa(A-2C)| > t|\bar{\kappa}C|, \quad 0 \leq t \leq 1$$

$$(3.54) \quad |\ell|\ell|^2(A-2C)| > t|\ell^3C|, \quad 0 \leq t \leq 1$$

がなりたつかう、

$$(3.55) \quad \kappa(A-2C) - \bar{\kappa}C \sim \kappa(A-2C), \quad \text{on } D_\varepsilon \text{ over } 0,$$

$$(3.56) \quad \ell|\ell|^2(A-2C) - \ell^3C \sim \ell|\ell|^2(A-2C), \quad \text{on } D_R \text{ over } 0,$$

(したがって、(3.52)は計算される。(3.55), (3.56)により)、

$$(3.57) \quad \deg_{\mathbb{S}_i}(B_0, S^3, 0)$$

$$= \deg(\kappa(A-2C), D_\varepsilon, 0) + \deg(\ell|\ell|^2(A-2C), D_R, 0)$$

$$= 1 + 1 = 2.$$

$$(iii,1.2) \quad |A-2C| < C. \quad \text{このとき},$$

$$(3.58) \quad |\bar{\kappa}C| > t|\kappa(A-2C)|, \quad 0 \leq t \leq 1$$

$$(3.59) \quad |\ell^3C| > t|\ell|\ell|^2(A-2C)|, \quad 0 \leq t \leq 1,$$

がなりたつかう、

$$(3.60) \quad \kappa(A-2C) - \bar{\kappa}C \sim -\bar{\kappa}C, \quad \text{on } D_\varepsilon \text{ over } 0$$

$$(3.61) \quad \ell|\ell|^2(A-2C) - \ell^3C \sim -\ell^3C, \quad \text{on } D_R \text{ over } 0$$

(したがって、(3.52)は、(3.60), (3.61)を用いて計算される)：

$$\begin{aligned}
 (3.62) \quad & \deg_{S_1}(B_0, S_3, 0) \\
 &= \deg(-\bar{k}C, D_\varepsilon, 0) + \deg(-\ell^3 C, D_R, 0) \\
 &= -1 + 3 = 2.
 \end{aligned}$$

最後に (iii, 2) がなりたつときは, $|E - 2C| \neq E$ がなりたつ.

(iii, 2.1) $|E - 2C| > C$. このとき, (iii, 1.1) と同様にして, (3.48) を計算できる.

$$\begin{aligned}
 (3.63) \quad & \deg_{S_1}(B_0, S^3, 0) = \deg(k|k|^2(2C-E), D_R, 0) + \deg(\ell(2C-E), D_\varepsilon, 0) \\
 &= 1 + 1 = 2.
 \end{aligned}$$

(iii, 2.2) $|E - 2C| < C$. このとき, (iii, 1.2) と同様にして, (3.48) を計算できる.

$$\begin{aligned}
 (3.64) \quad & \deg_{S_1}(B_0, S^3, 0) = \deg(k^3 C, D_R, 0) + \deg(\bar{\ell} C, D_\varepsilon, 0) \\
 &= 3 - 1 = 2.
 \end{aligned}$$

さて, 単像 $\beta_\varepsilon: S^3 \rightarrow \mathbb{C}$ を,

$$(3.65) \quad \beta_\varepsilon(a, \ell) = \begin{cases} \frac{1}{\varepsilon^2} \widehat{\beta}(a, \ell, \varepsilon), & 0 < \varepsilon \leq \varepsilon_0 \\ B_0(a, \ell), & \varepsilon = 0 \end{cases}$$

により定義する. このとき (i) の後半の議論と同様にして,

$$(3.66) \quad \deg_{S_1}(\beta_\varepsilon, S^3, 0) = \deg_{S_1}(B_0, S^3, 0) = 2$$

を得るから, degree の性質により, $0 \leq \varepsilon \leq \varepsilon_0$ に対して,

$B_0(a, \ell) = 0$ の解からの continuation が可能である。したがって, (iii) の場合も (i) と同様の結果がえられる。

以上により, 定理 1.4 の証明は完結した。□

REFERENCES

- [1] M. G. Crandall and P. H. Rabinowitz, the Hopf bifurcation theorem in infinite dimentions, *Arch. Rational Mech. Anal.*, **67**(1977), 53-72.
- [2] M. Golubitsky and J. Guckenheimer, Multiparameter bifurcation theory, *Amer. Math. Soc.*, Providence, RI, 1986.
- [3] M. Golubitsky and D. Schaeffer, Bifurcation with $O(3)$ symmetry including application to the Benard problem, *Comm. Pure Appl. Math.*, **35**(1982), 81-111.
- [4] J. Hale, Theory of functional differentioal equations, Springer, New york-Heidelberg-Berlin, 1977.
- [5] G. Iooss and D. Joseph, Elementary stability and bifurcation theory, Springer, New York-Heidelberg-Berlin, 1980.
- [6] J. Ize, Bifurcation theory for Fredholm operators, *Memoirs Amer. Math. Soc.* **174**, 1976.
- [7] J. Ize, Periodic solutions of nonlinear parabolic equations, *Comm. Partial Differntial Equations*, **4**(1979), 1299-1387.
- [8] T. Kato, Perturbation theory for linear operators, Springer, Berlin, 1966.
- [9] J. Marsden and M. McCracken, The Hopf bifurcation and its applications, Springer, New York, 1976.
- [10] Y. Morita, Destabilization of periodic solutions arizing in delay-diffusion systems in several space dimensions, *Japan J. Appl. Math.*, **1**(1984), 39-65.
- [11] L. Nirenberg, Topics in nonlinear functional analysis, New york Univ. Lecture Notes, 1974.

- [12] D. H. Sattinger, Topics in stability and bifurcation theory,
Lecture Note in Math., 309, Springer, New York, 1972.
- [13] D. Schaeffer and M. Golubitsky, Bifurcation analysis near
a double eigenvalue of a model chemical reaction, Arch.
Rational Mech. Anal., 75(1981).
- [14] J. T. Schwartz, Nonlinear functional analysis, Gordon and
Breach, New York, 1969.
- [15] S. D. Taliaferro, Bifurcation at multiple eigenvalues and
stability of bifurcating solutions, J. Funct. Anal., 55(1984),
247-275.
- [16] Y. Yamada and Y. Niikura, Bifurcation of periodic solutions
for nonlinear parabolic equations with infinite delays,
to appear in Funkcial. Ekvac..
- [17] K. Yoshida, The Hopf bifurcation and stability for semilinear
diffusion equations with time delay arising in ecology,
Hiroshima Math. J., 12(1982), 312-348.